

『東方』二九七号より

男女間の超えがたい溝を描く

萩野脩二(関西大学)

飯塚容氏の訳した『母』という短篇集には、高行健の八篇の作品が収集されている。

高行健(一九四〇-)、そう、あの中国人で初めてノーベル文学賞を取った男だ。彼の文学作品がどんなものであるか、この『母』という短篇集は、手ごろにわかりやすく紹介する本となっている。そういう意味で、お勧めの本だ。収録されている八篇とは、「母」「円恩寺」「公園にて」「瘡癩」「交通事故」「おじいさんに買った釣り竿」「瞬間」「花豆——結ばれなかった女(ひと)へ」であり、訳者飯塚氏の「解説」がついているので、作品の意義も良くわかる。

底本としたのは、台湾の聯合文学出版社「給我老爺買魚竿」で、二〇〇一年の増訂本であるそうだが、私に言わせれば、これは、長年高行健について研究してきた飯塚氏自身が選んだ「高行健短篇集」といっても良いのだ。それほど、この短篇集には、飯塚氏の愛着がこめられている。

それは飯塚氏の「解説」に述べられているように、選択された作品のうち、「母」と「花豆」の二篇を特別に付け加えたことに表れている。

その「母」という作品は、二十年前に母親を失った息子回想である。長男である「ぼく」の率直な心情吐露が、私には異常な感じで眼に飛び込んできた。

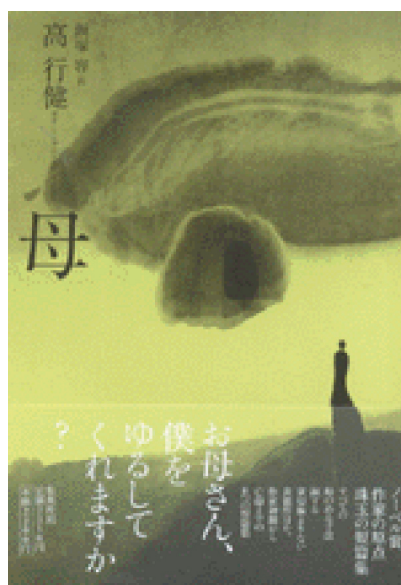
「ぼくを残していったとき、あなたはいまのぼくよりも若かった。あなたは一九六一年に世を去りました。ぼくは、あなたがいくつで世を去ったのかも覚えていません。

▶ トップページにもどる

高行健著・飯塚容訳

『母』

四六判・二二三頁・集英社・二、三二〇円



僕は親不孝な息子です！ ぼくを許してくれますか？……」（九頁）と、畳み掛ける告白は誠実で心を打つ。

この作品が一九八三年『十月』第四期(原題は「母親」)に発表されたことに驚きを隠せない。個人的な思いと感情とが何の憚ることなく披瀝されているからである。個人的な体験を基にした思いと感情は、当然のように個をとりまく状況への不満と告発になる。これが時代である。そして、だからこそそういう書き方は抑制されるべき対象ともなった。それは「精神汚染反対」のキャンペーンとなつて、高行健の創作活動を制限するものとなつたのである。

この「母」という小説では、母親が出身問題で労働改造の農場に追いやられながら、なおも息子のことを思い、心身を犠牲にして成し遂げた好意の一つ一つを、今、当の息子がやっと理解するという構造である。この構造自体は、何ら新しいものではないが、母親の好意を知らないがために

逆恨みしたり、或いは知っていても若気の至りで却って反発の態度を取るなどということは、誰しもあることであるから、そういう意味でも哀切な感じをもたらす。まして逆境にある母親の命を賭しての好意であれば、なおさら涙を誘うものとなる。一言で「文革」という状況は、こういう屈折した関係を多くの家庭に強制的に残した。そして人々は無告の民として過ごさねばならなかった。だから、*「ぼく」*の告白は、そういう無告の民の代表ともなっているのである。

ただ、この「母」という作品は、文革ではなく、それ以前の年に母親は亡くなっている。また、実を言うとも母親は、党の呼びかけに応えて自ら進んで農場に行ったのであった。これもまた、無告の民の悲しいサガかもしれない。そういう党と人民との関係は、のちの高行健の長篇小説『ある男の聖書』（飯塚容訳、集英社、二〇〇一年）の一つのテーマともなっていると言っても良いだろう。

それはそれとして、この「母」という作品は不思議なリアリティをもつて、今も我々に訴えかける。そのリアリティは、題材としての真実性だけでなく、多分に、*「ぼく」「彼」*そして*「おまえ」*と人称を変化させて使用しているところに起因するだろう。つまり作者の語りのありようが、事柄としての母親の労働改造と、文革へ集約されていく息子世代の高揚とがすれ違うという内容を浮き立たせるのであるが、それが*「ぼく」と、「あなた」*なり*「お母さん」*という直接的な二者の関係だけで成立されてはいない。二者の関係だけでは、どこかしら影を落とす曖昧な欺瞞性が生ずるのであるが、対象となる主人公を*「彼」*として客体化してみたところに、まず二者の補完性が薄れ、客観性が存在するように思える。こういう工夫は、フランス文学に精通して

▶ トップページにもどる

いて『現代小説技巧初探』（花城出版社、一九八一年）を出したことのある作者ならではの特色の一つであろう。

だが、私にはそれ以上に、*「彼」*だけでなく、*「おまえ」*として自分で自己を剔抉する言い方も使用したところに、この作品の臨場感が生まれ、事柄のリアリティを強めたような気がした。

「学部事務室の人がやってきて、彼に言いました。「いつ、家に帰るんだ？」「もう切符は予約してありますから、休みになったらすぐ帰ります」おまえはまったく予期していなかった。家から電報が届いていたが、先生はそれをおまえに渡さなかった。ただ早く帰るように暗示を与えただけだった。おまえは、その言外の意味を理解できず、詳しく尋ねようとしなかった。おまえは、まったく迂闊だった」（二二頁）

もちろん、原文は*「你」*である。それを*「おまえ」*と訳したのは、飯塚氏である。高行健の作品の*「你」*を、*「きみ」*でもなく、*「あなた」*でもなく、譴責するような*「おまえ」*と訳したところに、飯塚氏の高行健の作品の理解の的確さを私は感じた。

高行健の作品は言ってみれば、*「おまえ」*の文学である。読者は、この言葉によって喚起される、主人公と同列の世界に立たされ、しかも負を背負った、取り返しの効かぬ記憶と意識の世界にいざなわれる。こういう時空こそ、高行健の文学世界だと私は思うが、このことは、高行健の長篇小説『靈山』（飯塚容訳、集英社、二〇〇三年）に一層顕著である。が、今はこの一九八三年の「母」という短篇にすでに芽が出ていたことに驚愕しておけば足りるであろう。

飯塚氏が好んだ「花豆」という小説は、一九八四年九月号

の『人民文学』に載った作品である。五十歳の誕生日を迎える「ぼく」が幼馴染で恋人であった「花豆」への思いを一人雨の日に思い描く。「ぼく」は医者から、高血圧症の診断を受け、安静療養を言い渡されたのであった。したがって、ここには、「きみ」への思いを通して自分の過ぎ来し方が回想されることになる。時間というものの移ろい易さと、男と女の理解しあえない関係とが独り語りされる。とりわけ高行健は、男女の理解がずれることを、つまり永遠に男女は理解しあえないことをテーマとしているが如くである。男女が理解しあえないことを明確に意識するのは、実は青春の時ではなく、中年から老年になった時なのだろう。若い時は、相手の心がわからないので、勇気が出ない。人と人との関係に必要なのは相手への配慮ではなく、勇気なのである。

土曜日の夕食後、彼はきみの宿舎を訪れた。ほかのクラスメートたちは実家に帰ったり、外出したりで、きみたちは二人きりになった。彼はしきりに懇願した。夜中の十二時すぎに、きみは彼を追い返した。しかし翌朝七時、彼はまた、きみの部屋のドアをノックした。まる一日居すわって、自分の身の上、孤独な心、きみへの愛情を語った。彼は孤児で、身寄りが無い。母方の叔母が香港にいただけだった。きみがプロポーズに応じてくれるなら、どんな困難の待つ場所へでも一緒に行くと誓った。さらに彼は、結婚後は決してつらい思いをさせないと誓い、きみのベッドの前にひざまずいた。きみが要求したわけでもないのに、彼はひざまずいたのだ。月曜日の朝になって、きみはようやく涙ながらにプロポーズを受け入れた。それは愛情ではなく、憐れみだった、ときみは言った。きみの夫は確かにきみを愛していた。きみも彼に尽くした。でもきみは、ぼ

トップページにもどる

くたちの幼年時代を忘れることができなかった。もう一度ぼくに会いたかっただけで、それ以外には何もない。今度は二度と里帰りすることもないだろう。きみは泣きながら、そう言った（一六四頁）

長い引用になったが、ここに描かれているのは、「ぼく」の思い人である「花豆」が、「ぼく」と結婚することにならず、「彼」と結婚することになったいきさつである。結婚と愛情とが必ずしも一致しないのが普通の人生である。ただ、ここで注目しておいて良いことは、高行健には強い思いがあることであろう。幼年時代の生活がどんなに悲惨で窮屈であろうとも、そこに存在した子供達にとってはかけがえのない交流と生活があつたのである。その生命の燃焼を高行健はいとおしむ。さらに、その時の稚拙な交流に対する苦味が重なる。この思いが高行健の一つの抒情を醸し出しているであろう。

それは愛情ではなく、憐れみだった」というのは、しかし、年を経た後年の判断であろう。愛情にせよ同情にせよ憐憫にせよ、そんなに判然と区切ることが出来るものではないのだ。そのような判定はその後のさかしらな生活の知恵がもたらしたものであろう。女性にも男性にもある、こういう年を経た後の智恵と、智恵に対する情念の不満とを高行健は、その後の長篇で追い求めていくような気がする。そういう兆しが見えるのは、この「花豆」だけではなく、「瞬間」という作品に一層顕著である。この亡命作家達が集まって作った雑誌『今天』に掲載された作品「瞬間」には、一筋縄では捕らえられない女性に対する認識が濃厚に出ている。この点が、高行健の作品の八十年代と九十年代以後の違いであるような気がする。

ところで、ここに引用した、「彼」の求婚の部分は、『人

民文学』では殆ど削除されている。最初の土曜日の夕食後から、彼はひざまずいたのだ。までの部分がないのである。飯塚氏も指摘しているが、「花豆」という作品における『民文学』編集者の改変は、かなり多い。総じて、元気の良い方向へ手直しがなされている。

この八篇の作品の中で、私がわりと気に入ったのは「公園にて」であった。飯塚氏に抛れば、ほとんど会話のみ。高行健が劇作家として多くの仕事を完成させる予兆がうかがえる（二二二頁）ということである。確かにその通りなのであるが、一言付け加えたい。

別れたかつての恋人同士が公園で再会する。たまたまやって来た若い娘がどうやら恋人を待っているようなのであるが、ついにその男は現れず、娘はすすり泣きをし出す。二人の会話は、二人の過去の交流を再現するものであるが、中にこんな会話もある。

「あの娘（こ）は顔を覆ってすわった。手で顔を覆っているように見えたが、斜面も並木も薄暗くて、はつきりしなかった。鳥のさえずりが聞こえる。」

「鳥もいるのか？」

「森じゃなくても、鳥ぐらいいるわ」

「スズメもいる」

「あなたは傲慢になったわね」

（五一頁）

こういう会話の飛躍に私はハッとさせられる。二人が同じことを思いながら、話題は別なことを話し、互いに相手の過去を探る。場合によっては、それは相手の心をむき出しにさせることになるかもしれない。場合によっては、相手を慰撫して別のイメージに転化するかもしれない。高行健の会話は大体において、相手をむき出しにして、イラッ

▶ トップページにもどる

く主人公の煩悶を浮き立たせる。ここでもすぐ続いて、
「こうやって生きてきたんだ。傲慢さがなかったら、今日という日もなかった」

「世を恨むのもいい加減にしない。苦しんだのはあなただけじゃないのよ。誰もが農村へ送られた。わかるでしょう。農村へ送られた女の子は身寄りもなく、男の人よりずっと苦労が多かった。私が彼と結婚したのは、ほかにそれ以上の選択肢がなかったからよ。彼の両親は手を尽くして、私を都会に呼び戻してくれたの」

「きみを責めているわけじゃない」

「あなたに私を責める権利はないわ！」

「誰にも他人を責める権利はない」 （五一〜五二頁）

となる。この会話は、二人の過去を実に簡潔にわからせる。したがって高行健の要領の良い会話能力もわかる。だから、飯塚氏は男女間の感情の行き違い、超えがたい溝は、この作家の永遠のテーマである（二二二頁）というのであろう。

先に述べたように、会話は状況を説明する効力を発揮するだけではない。一見すれ違いの会話のように見える時こそ、つまり会話の飛躍に、別のイメージが喚起され、二人の関係があらわになる時がある。そういうものこそ会話の妙であろう。高行健にはどちらかというと、直裁に事柄を述べようとする会話がが多いが、それでも、醸し出されるイメージの真実を伝える場合もある。これがその後も会話形式を多用する基になっているような気がした。

『母』に収録されている八篇は、男女間の超えがたい溝を描いている作品群であるといっても良いだろう。それは、のちの長篇小説『霊山』や『ある男の聖書』に続く、高行健のテーマでもある。つまり、人生の経験を経た苦味のある

▼『東方』297号より
五 男女間の超えがたい溝を描く
▲萩野 脩二

物語、取り返しのつかぬ思い出と解脱できぬ意識とに拘泥せざるを得ない人生の話なのである。〔二〇〇五・八・十二〕

[トップページにもどる](#)